日高壮之丞と東郷平八郎

日露開戦前の常備艦隊司令官は猛将といわれた、海軍中将日高壮之丞であった。日高は西郷従道や山本権兵衛、東郷などと同じ薩摩育ちである。日高自身は、開戦となれば自分が日本艦隊の司令官に選ばれるものと思い込んでいた。彼は海軍兵学校時代、薩摩グループの首領として毎日を喧嘩三昧に明け暮れていた山本権兵衛の義兄弟として上村彦之丞や伊集院五郎など、錚々（そうそう）たるメンバーと共に校内を闊歩していた。山本と日高は戊辰戦争からの戦友であり、山本が相撲取りになろうとした時も日高は誘われてもいる。海軍兵学校で山本が暴れ回っていた時も、日高は常に山本の傍にいた。

日高 壮之丞

日露開戦を目前にして、艦隊最高責任者である自分が義兄弟にあたる山本から更迭されるという不名誉なことを突き付けられたのである。日高にとっては信じられない出来事だったに違いない。日高は抜刀も辞せずと山本に詰め寄った。興奮する日高に権兵衛は**「能力という点からはお前の方が高いだろう、しかし今度の戦いは国運を賭けての必勝でなければならない。しかしお前は時に参謀本部に諮（はか）らず、己の判断で行動することもあるだろう。東郷にはそれがない。」**と静かに諭した。気性の激しい日高は号泣したといわれている。だが

日高は説得を受け舞鶴鎮守府司令長官に就く。その後、男爵、海軍大将に昇進する。昭和 7 年 84 歳で死去。

山本は東郷を本部に忠実で功に奔らぬ軍人とだけ評価していた訳ではない。決戦の直前にバルチック艦隊の航路を対馬か太平洋かで秋山達が迷っている時、軍司令部は対馬待機を発しようとした。それに断固反対したのが山本であった。**「現場の事は全て東郷に任せてある。もしそれに対し後方から容喙（ようかい）するような事があっては戦いなど出来るものではない。後方が現場に関与してはならない。」**この言葉に権兵衛が東郷を如何に信頼していたかが窺（うかが）える。

出征時の東郷中将（58才）

薩摩弁で**「議を言うな」**という言葉がある。**「議」**とは議論であり、口答え、不平、文句を意味する。そして主に目上の者が部下や後輩や子弟に使う言葉でもある。日本では薩摩兵が一番強いと言われた、その強さの要因は一貫した軍事教育を施していたことが大きい。その一つが、命令系統の混乱を招く「議」への批判教育だった。薩摩人は存外に陽気でユーモアを好み、それでいて勇猛な人間を育むようだ。そこには従順な中に時として上司でも平気で刃向う獰猛な性質も隠れているようだ。日高は己の才を恃（たの）むところが多く、自ずとそこには限界が生じてしまう。

日露開戦にあっては「単なる勝利でなく、敵の殲滅」という過酷な使命を伴っていた。その使命に「議」を持ち込むことを山本は恐れたのである。東郷にはそれがない。与えられた使命を理解して達成することを本文とする軍人である。（しかし東郷でさえ、若い時は「ケスイボ」の渾名を持ち、その機知からよく「議」を差し込んだことだろう。大久保の逆鱗に触れたのもそれが原因だったのだろう）。だが、ともかく東郷は変った。しかし「絵にかいたようなボッケモン」と言われた日高は若い頃から何も変わっていない、と山本は観ていたのだ。そして東郷がなぜ変容したのか山本は知っていた。

注）大久保と東郷の逸話
当時イギリスへの官費留学を希望していた東郷は、中央政権の要職を務めていた大久保に志願するが、却下された。その後、大久保が彼について「東郷はおしゃべりだからダメだ」という評価をしていることを伝え聞き、それからは東郷は自省をし、寡黙であることに努めた。

山本も日高も薩摩人の典型的豪傑の称号である「ボッケモン」の渾名を持っている。日高の場合はさらにそこに「絵にかいたような」という形容詞が付いている。そこが日高壮之丞に日本の運命を託せなかった大きな理由である。「ボッケモン」は『ボッケモン』の欠陥を知っていたのである。

平成 27 年 12 月 27 日

志雲会代表　有馬正能